

大学教養課程カリキュラムにおけるGreat Books Seminar導入の試み —Liberal Arts教育実践のためのDialogue型授業のモデルプログラム—

江 藤 裕 之*1

【要 旨】 教養・人格形成の場としての大学教育を見直すことを目的とし、大学教養課程における一般教育の理念と実践とを考察する。まず、西洋におけるLiberal Arts教育の歴史と意味、及びその精神を現代に活かしたMortimer J. AdlerのGreat Books Seminarを概観する。そして、実践編として、今日のわが国の大学におけるLiberal Arts教育実践のために、「言語・思考・人間」というテーマでのDialogue型授業モデルプログラムを示し、1)基本テーマの設定、2)プログラム構成とテキスト選定、3)各セッションの議論テーマ、4)到達すべきIdeasについて考察を加えながら、Great Books Seminarの可能性と有効性を考える。ひとつのテーマについて複数のテキストを読み議論することで、より普遍的な問題へと到達し、目には見えないものの価値を認め、生涯にわたる学習を動機づける学習の方法論を考えてみたい。

【キーワード】 教養課程、一般教育、Liberal Arts、Great Books Seminar、Dialogue型授業

はじめに

高度の技術産業社会である今日のわが国において、大学は社会を支える存在としてその要請に応えること、すなわち、研究・教育機関として日々新たに技術を開発・実用化し、その技術を実社会で運用する専門家を養成することが期待されている。このような、社会に直接、そしてすぐに「役に立つ」学問を推進する実学志向は現代の大学に不可欠である。しかし、同時に研究・教育を通じて個々人の人格を陶冶し、また教養を深める場としての伝統的な大学の意義も忘れてはならない。

本稿では、“Bildung”(教養・人格形成)の場としての大学教育を見直すことを目的とし、大学教養課程における一般教育科目の理念と実践を考察してみたい。具体的には、Liberal Arts教育実践のためのDialogue型授業導入を目指したモデルプログラムを示し、一般教養カリキュラムの中でAdlerの提唱するGreat Books Seminarの可能性を探ってみる。

Liberal Arts教育とGreat Books Seminar

1. 「一般教養」の意味

「余暇」を意味するギリシア語σχολή(スコレー)は、「学校」を表す英語schoolやドイツ語Schuleの語源である。教養や人格形成の場を指す語の原義が「余暇」であるというのは、余暇こそが西洋文化を支える基礎であり、学校は単に労働のための知識を詰め込むばかりの場所ではなかったことの証左である。

アリストテレスは『ニコマコス倫理学』の中で「幸福は余暇(スコレー)に存すると考えられる」と述べている。この意味するところは、人間(=自由人)が「労働的技術(artes serviles)」を超えた「(労働から)自由な学芸(artes liberales)」を修め、「活動的生活(vita activa)」から「観照的生活(vita contemplativa)」を実践することで、人間の本質的欲求のひとつである「真に対するニーズ」を満たし、その結果、幸福になり、よりよく生きることができるとのことである。アリストテレスが『形而上学』の冒頭で言うように「人間

*1 長野県看護大学
2002年9月19日受付

は本質的に知ることを欲する」存在、すなわち人間は知識を求める存在であるのなら、観照的生活の実践から「真なるもの」を追い求める姿は、まさしく人間的なものであろう。「作る存在」として「美に対するニーズ」を満たし、「行動する存在」として「善に対するニーズ」を満たすのと同様に、「知る存在」として「真に対するニーズ」を満たすことは人間の本性にかなっている (Adler, 1978)。

Joseph Pieper は観照的生活を「日常世界のあらゆる心づかいや関心をはなれ、小さな自我をぬげることによって、世界をあるがままにながめ、その創り主にふれること」(Pieper, 1988: p.25) とし、その背後にアリストテレスの余暇の思想を認めている。この「世界をあるがままにながめる」観照的生活の基礎となるものが Liberal Arts である。

Liberal Arts (自由学芸) は諸学の基礎として、西洋の学芸の伝統において(1)言語による自己表現術に関する基礎三科 (trivium: 文法, 論理・弁証, 修辞) と(2)自然科学系の四科 (quadrivium: 幾何, 算術, 音楽, 天文) からなる。「自由」の意味は、「奴隷的労働から解放された」ということであり、上述のように「自由学芸」は「奴隷的技術」と区別された。つまり、奴隷が行う何かひとつの労働 (専門的仕事) に合った技術に対し、Liberal Arts とは「自由人が諸学の基礎となるような原理的なものの見方、考え方を習得することを目標とし、すべての学問に共通する本質的事項の理解を推進する技 (art) を習得するための基礎教育」と定義できよう。

その意味で、孔子が「君子は器ならず」(『論語』為政第二) と言ったように、人間や社会への鋭い洞察から、目には見えない「もの」の本質をつかみ、狭い専門家としてではなく、「真・善・美」すべての事象に通じる普遍の真理を会得し、それを行動規範として自らを律している人間こそが「教養人」とであると解釈される。大学教養課程における一般教養の授業には、いずれは社会に出て専門家として活躍することが期待されている学生に、「時空を超越して普遍・不変的」という意味でのより universal/general なものの見方・考え方を与える場として、生涯を通して学ぶ教養人の基礎を与えることが求められよう。

2. Great Books Seminar の概要

このような Liberal Arts は西洋世界においてはギリシア・ローマ以来の伝統を持つが、その精神を現代に具現化したのが Mortimer J. Adler の Great Books Seminar プロジェクトである。Adler の仕事を貫く考えは、日常的仕事に直接役に立つ知識や技術を身につけるための職業教育・専門教育偏重の流れに対抗する Liberal Arts 尊重の思想であり、その具体的方法論の実践が Great Books Seminar であった (Adler, 1984, 1988)。この Great Books Seminar が、技術万能社会であった 1930 年代のアメリカで初めて登場し、その後、大学で、また生涯教育セミナーの場で広まっていった。

Great Books Seminar 成立と発展の経緯については松田他 (1999) の文献に詳しいのでここでは省略するが、セミナー進行上での重要な点を以下に簡単に述べてみよう (Adler, Doren, 1972)。

- 1) 名著・古典よりのテキスト (Great Books) を徹底的に読み、そこに述べられていることを正しく理解する。これを Analytical Reading (分析読書) という。Great Books とは重要な概念や問題に本質的に触れるような内容を、普通の人々に理解できる言葉で語り、そして時代を超えて人々の精神に働きかけるものであり、何度も読み返す価値のある書物のことをいう。(ここで言う Great Books とは普通名詞であり、Hutchins と Adler により選定・出版された *Great Books of the Western World* [1952] や、その他特定の出版社の「古典全集」などといった固有のものをさしているのではない。)
- 2) Analytical Reading により、そのテキストの持つ「主題」をえぐり出し、そこから時代を超え、世代を越えて議論の対象となるような Ideas へと到達する。ここで言う Ideas とは、人の心の中に浮かんだ考えや漠然とした感じ、空想、印象、思いつきなどではなく、議論の対象となるもの、すなわち複数の人間にとって普遍的価値を求めて議論する際の「共通の対象」「思考の対象」となるものである。さらに、その Ideas を深めるため複数の Great Books を読み、それぞれの内容を比較対照しながら、そこで扱われ

ている共通の Ideas についてまとめてみる。これが、Syntopical Reading（トピックを統合する読書）である。

- 3)このような Ideas に触れることで、目には見えない知的な世界の価値を認め、それが時空を超越した普遍的存在であることを確認する。そして、この普遍的価値こそが、「知を求める」人間がよりよく生きるための精神のよりどころとして、何をすべきかについての指針を与えてくれるものであると認識することができる。

以上の読書法が Liberal Arts を推進する Great Books Seminar のエッセンスである。もちろん、この方法はひとりで実施することも可能だが、Adler は「対話 (Dialogue)」という西洋における伝統的教育手法を導入し、司会進行役としてのモデレーターを中心に、複数の読者の対話形式セミナーにより、「共通の Ideas についてまとめてみる」ことを自分の言葉を使って実践させている。これは、ソクラテスの産婆術の技法を現代に活かしたものである。

では、Adler によるモデルセミナーのひとつ（高校生以上対象の5日間のセミナー）を簡単に紹介しよう。テキストと各セッションの目標は以下の通りである（松田他，1999）。

第1セッション：プラトン『ソクラテスの弁明』（全文）

目標→本の読み方とディスカッションの仕方をつかむ

第2セッション：アリストテレス『政治学』（第1巻第7章まで）

ルソー（第1巻第8章まで）

目標→政治哲学の Great Books を学ぶ

第3セッション：マキャベリ『君主論』（第15章、第18章）

目標→君主論を現代社会との関連で読み込む

第4セッション：アメリカ合衆国憲法（主に第2パラグラフ）

目標→独立思想を正確に学び、市

民思想を会得

第5セッション：ソフォクレス『アンティゴネー』（全文）

目標→フィクションへの関わりかた、悲劇の本質を考える

このセミナープログラムでは、各セッションにおいて、1)本文の主要 Ideas に関する自由な討論をテキストの本文に即して行い、2)自分の主張の論拠を明確にし、また他人の主張を理解しようと心がけ対話を楽しみ、そして、最終的に、3)各セッションで扱われたテキストがどのような Ideas を述べ、それらを貫く共通する Ideas を求めてみる。

上記のテキストには一見何の脈絡も感じられないが、実はそれぞれのテキストの底には、「法」の概念をテーマにした「自然 vs 人為」（法律用語では「自然法 vs 実定法」）が根本 Ideas として存在し、そこから「アイデア vs 現象」「理想 vs 現実」「nature vs art」などの Ideas の対立関係が見て取れ、そこから「デモクラシーとは何か」「国家と個人の関係はどうあるべきか」「人間における『自然』とはどのような状態か」などという普遍的な問題を考えるパースペクティブが与えられる。このように、Great Books をテキストとして読み込み、その内容を議論することで、個別的・具体的な問題に対処するために、時空を超越した普遍的な視点に至ることが Great Books Seminar の意義であり、また現代に有効な点でもある。

Great Books Seminar 実践としての

Dialogue 型授業の可能性

— 「言語・思考・人間」というテーマでのモデルセミナープログラム —

それでは、一般教養カリキュラムの中で Liberal Arts 教育を実践するための Dialogue 型授業のモデルを示し、Great Books Seminar の精神を活かした授業プログラムの可能性を考察してみよう。ここでは、大学（学部・大学院）のセミナーから、教養講座、図書館などでの読書会、そして自主勉強サークルなどで実施可能なセミナーのモデルプログラム作成を目指し、セミナーの場で提示するシラバスの内容（テーマ設定、

プログラム構成と書物選定、到達すべき Ideas) の吟味を行いつつ、モデルプログラムの可能性と有効性を議論したい。

1. 基本テーマ設定

まず、テーマ設定であるが、参加者の誰にとっても共通する日常的なものを選ぶ。そこで「言葉とは何か」を基本テーマとして、「言語・思考・人間」の関わりを扱った Great Books を読み、そこから「言語の本質」、さらにはその背後にあるより深い Ideas へと議論を進めてみる。参加者に前もって知らせるテーマとその内容、及び解説は以下ようになる。

テーマ：言語・思考・人間

内容：人間を他の動物と区別し、最も顕著に人間を特徴づける要素である言語について、その本質、特性、及び言語の学問の応用性を学際的な視点に立って議論する。したがって、本セミナーは狭義の「言語学概論」ではなく、言語という窓を通して人間精神を理解するという広義の言語論を目指す。つまり、諸学の基礎となる知識の前提としての「言語（ロゴス）の学」を目標とし、特に「意味」「思考」「認識」等と「言語」との関連や、言語の持つ「力」を考える。

解説：アリストテレスの「人間は言語（ロゴス）的動物である」（『政治学』）という言葉を持たずとも、人間を他の動物と明確に分ける要素は言語の有無である。ここで、言語の定義には深く立ち入らないが、確認しておきたいのは、言語は伝達の道具のひとつではあるが、伝達（コミュニケーション）行為そのものは言語ではないということである。言語は人間の精神の表れであり、精神とは言語活動のことである。ここで、ギリシア人が言語、思考、理性を「ロゴス」というひとつの語で表した洞察の深さが理解できる。したがって、言語は人間精神と強く結びつき、それゆえに人間精神を動かす力を持つ。言語には力があるのである。さらに、言語には人間の内面への影響以外にも、天地をも動かすといった自然に対する力を持つ、すなわち「言霊」という考えがある。以上の

ような観点から、言語について議論している Great Books を読み、議論をすることで、人間をもっとも人間らしいものとして特徴づける「言葉」の本質を考えてみたい。

このテーマであれば、大学レベルの一般教養科目として、また専門科目としても「言語学入門」や「言語文化演習」などのゼミナールの内容として十分であり、また有志による読書会、生涯学習プログラムや啓発セミナーにおいても「言葉から人間の本質を考える」場として言語学の専門的知識のない一般参加者にも十分議論に参加できる内容となる。セミナー参加者の適正数としては、各人が活発な議論を行うことを目標にしているため10名～20名が最も適切であろう。プログラム構成は次のようなものとなる。

2. プログラム構成とテキスト選定

本モデルプログラムは5セッション構成である。大学の授業として行う場合は、5セッションを2つのパートに分け、90分のセミナーを10回行うことで完了する。また、自主セミナーの場合は、各セッションを2時間前後で行い、5回完結とする。いずれの場合も、セミナーの進め方と、テーマに関する基本的な了解事項（ここでは、「言葉」をテーマとして取り上げる意味と問題意識について）について説明するためのオリエンテーションの時間を設けることが望ましい。

テキストは「言語・思考・人間」をテーマにした Great Books から以下の箇所を抜粋したアンソロジーを準備し、事前に参加者に配布し、熟読するように指示する。また、参考資料、参考文献として言語、文化、社会に関する名著古典から現代の研究に至るまで幅広く指示する。これは Syntopical Reading をより充実させることが目的である。

では、以下に「言語・思考・人間」セミナーのセッション進行、各セッションの位置づけ、そして読むテキストを示してみる。

Orientation：セミナーの進行とテーマの説明

Session 1：言語の「学」の源流

Dialogue 1：プラトン『クラテュロス』（全文）

Dialogue 2: アリストテレス『政治学』(第2章),
『解釈学』(第1章)

Session 2: 言語起源論

Dialogue 3: 旧約聖書「創世記」(2: 19-20; 11:
1-9)

Dialogue 4: ヘルダー『言語起源論』(第2部)

Session 3: 進化論と言語

Dialogue 5: ダーウィン『人間の由来』(第3章,
特に「言語」の項)

Dialogue 6: マックス・ミュラー『思考の科学』
(序)

Session 4: 言語・民族・世界

Dialogue 7: フンボルト『言語構造の相違性とそ
の人間精神形成に与える影響につい
て』(第8節)

Dialogue 8: サピア『言語』(序), ウオーフ『言
語・思考・現実』(第1章)

Session 5: 科学としての言語学

Dialogue 9: ソシュール『一般言語学講義』(第
1編第1章, 最終章の最終段)

Dialogue 10: ブルームフィールド『言語』(第
2章)

以上の言語本質論, 言語起源論を扱ったGreat Booksを読み, 人間の現実認識がいか言語とそれによる思考に左右されるかを議論する。ディスカッションのテーマとしては,

- 言語の本質は何か
 - 人間の言語と動物の叫び声は本質的に同じか異なるか (程度の差か, 質の差か)
 - 言葉とそれが表す事物との間には本質的な関係があるか
 - 言語の起源はいかなるものか
 - 言葉には人間を動かす力があるか
 - 言葉と思考(認識), すなわち言語と精神活動は同じものか, 異なるものか
- などといった点が考えられる。

3. 各セッションの議論テーマ

次に各セッションの議論テーマの内容と, それぞれ

のセッションの関連性を示す。

Session 1

このセッションでは「言語の『学』の源流」というテーマで, 西洋における諸学の源であるプラトンとアリストテレスの言語観を読み, そこに西洋精神史を貫く典型的かつ対照的な言語観を見る。まず, プラトンの『クラテュロス』では, 事物とそれを表す名前との関係についての議論がなされる。そこでは, 現実の命名は理想(原型)の必然的な表れであり, 名前と事物との間には自然の関係が存在すると, ソクラテス(プラトンと言ってもよい)は主張する。これが, ギリシア時代の言語起源論における, 自然説(ピュセイ= by nature)の論拠となる。

アリストテレスは『政治学』(第2章)において, 人間の言語(ロゴス)が人間独自のものであり, 動物の叫び声とは本質的に異なることを力説している。また, 『解釈学』(第1章)の中で, プラトンの自然説に対抗して, 名前とそれが指し示す事物との結合は「慣習によるもの」であり, 両者間には必然的関係はなく, まったく恣意的なものであるとする人為説(テセイ= by convention)を採った。

この対照的な「自然説vs人為説」の対立は, 言語学における原理的対立となるのみならず, 人間に関する諸学(人文学, 社会科学)における対立図式のプロトタイプとみなすことができる。この点は後述する。

Session 2

プラトンとアリストテレスの項でも明らかなように, 言語の本質論議は究極的には言語起源論に行き着く。そこで, 言語起源論の古典とも言える『旧約聖書』の「創世記」と, 近代的言語起源論の嚆矢である Johann Gottfried von Herder の『言語起源論』を読む。

まず, 「創世記」からは, 神がアダムを万物の命名者とした話(2: 19-20)とバベルの塔(11: 1-9)の話テキストとして抽出する。前者では, 聖書における万物の命名者としての人間観と言語の「人為説」を読み取ることができる。また, 後者の「バベルの塔」の話からは, 世界中に存在する異なる言語の起源についての聖書の「合理的」説明と, 言葉によるコミュニケー

ションの重要性を見ることができる。

Herderの『言語起源論』からは第2部に挙げられている言語起源の第1自然法則から第4自然法則までを見ることで、言語が人間に発生した理由とその過程の説明を読み取る。簡単に言うと、Herderはそれまで「神によるもの」と片づけられていた言語の起源に関する諸説をくつがえし、言語を人間の内部からの必然的な表出であるとの論を立てた。つまり、人間の内部にあった動物的・本能的部分が退行し、その機能を埋め合わせるために、言語が必然的に生じたと言うのである。このように、Herderは言語を本能的反射の対局に存在するもの、すなわち心的活動（思考、理性）と同質のものにとらえていたがゆえに、Herderの言語起源論は、思考起源論でもあり、また理性起源論ともなる。

Session 3

このセッションでは、プラトン、アリストテレスで読み取った言語の考察における「自然説 vs 人為説」から、聖書やHerderの言語起源論のエッセンス、すなわち言語は人間特有のものであるという論点を二つの異なる角度から更に掘り下げていく。

まず、Charles Darwin『人間の由来』の第3章（特に「言語」の項）を読むことで、言葉に対する進化論者の立場を見る。ポイントは、人間の言語と動物の叫び声（人間と動物の知力、精神力と言ってもよい）は「質の差」ではなく「程度の差」に過ぎないというDarwinの主張をつかむことである。Darwinは人間と動物の間にあるとされた越え難い垣根を取り払い、動物と人間の連続性を主張し、人間の言語は動物の叫び声から進化してきたものだとする。

それに対し、Friedrich Max Müllerは『思考の科学』において、言語が一般概念をつくりそれが人間の認識に重要な役割を演じているという立場から、言語は人間に特有のものであり、人間の言語と動物の叫び声の間には質的な差異があると主張した。Max Müllerはその「序」で、「言語なくして理性なし、理性なくして言語なし (No reason without language; no language without reason.)」と述べ (Max Müller, 1888: p.iii), ログスとしての「言語と思考」の不可分

性を説いている。

このDarwinとMax Müllerの対立は、言語研究の際に「人間についての考察」を排除するか、重視するかという言語学の基本的な方法論的対立図式のモデルとみなすことができる。

Session 4

このセッションでは、前セッションのMax Müllerの言語観を敷衍する形で、言葉がそれを話す人々（民族）の世界を反映している、つまり「言語はそれを話す人の内面を映す」と主張するテキストを読む。

まずは言語相対性（言語と思考の相互影響性）についての古典ともいえるWilhelm von Humboldtの『言語構造の相違性とその人間精神形成に与える影響について』から第8節「言語の形式」を読む。ここでは、Humboldtの有名な言葉「言語はエルゴン（出来上がった作品）ではなく、エネルギー（活動性）である」(Humboldt, 1984: p.73)の意味を考える。これは、言語の創造性、すなわち「有限の材料から無限の表現を可能とする (infinite use of finite means)」言語の特性を述べているのだが、このアイディアは後にNoam Chomskyの生成文法理論の基礎となる。すなわち、言語は「刺激と反応」という限られた作用によるものではなく、無限の創造・生成を繰り返すものという考えである。また、HumboldtのForm（形式）という概念が、アリストテレスにおけるエイドスと同じものであり、ある固有の言語や思考を特徴づける「設計図」という主張も見逃せない。

さらに、この言語と思考様式の関連性（異なる言語を使用するものは異なる世界に住んでいる）を主張したEdward SapirとBenjamin Lee Whorfから抜粋する。まず、Sapirの『言語』の「序」から、言語が本能によるものではなく社会的学習によるもの、そして言語の多様性と言語構造がその使用者の思考形式や精神構造に関係があるという主張を読む。また、その点を実証的事例も含めさらに敷衍する形でWhorfの『言語・思考・現実』の第1章「アメリカインディアンの宇宙像」を読む。両者に共通する点は、言語の学問に人間の精神を問題にする視点を拒否しなかったことにある。

Session 5

最後のセッションは「個別科学としての言語学」の成立に大きな意味を持ったFerdinand de SaussureとLeonard Bloomfieldの著作を読む。前者は近代言語学の父、後者はアメリカ（構造主義）言語学の創始者と称されている。そして、両者ともMax Müller系ではなく、Darwin系の言語学、つまり言語の学問に人間の内的要素（精神や思考）を持ち込まずに、あくまでも言語を「言語そのもの」として、外側から研究するという立場を説いた。

まず、Saussureの『一般言語学講義』の第1編第1章「言語記号の性質」では、言語記号の恣意性、すなわち言語記号とそれが表すものとの間には内的なつながりはないという点に注目する。これは、セッション1で読んだアリストテレスの人為説に連なっている。その意味で、言語の研究から人間精神や言語外的（extra-linguistic）要素を排除することが原理的に可能となる。このように、Saussureは言語学を記号学として位置づけ、ギリシア・ローマ以来の伝統的言語学（philology）が常に隣接諸学問（哲学、論理学、心理学、美学）などとの従属関係にあった状態を抜け出し、「言語のための言語学」を創設した。その意味で、最終章の最終段の言葉「言語学の独自・真性の対象は、それじたいとしての・それじたいのための言語である」（Saussure, 1940: p.327）は重要である。

Saussureはプラトンや聖書以来の伝統的言語観、すなわち言語の名称目録的（概念が先に存在し、それに名前をつけることが言葉）観点を否定し、言語以前には認識対象は存在しない（「こと」と「もの」とは不可分のセットであること）を主張し、ギリシア以来の西欧における形而上学を支配してきたロゴス中心主義（logo-centric）への痛烈な批判を行った。この視点が記号学、構造主義の基盤となるが、言語の本質をめぐるさまざまな角度からの思索は、諸学における「実体論から関係論へ」というパラダイム変換となり、それゆえSaussureは「近代言語学の父」と称される。

最後は、Bloomfieldの『言語』から第2章「言語の使用」を読む。これは、Saussureにより「独立した科学」となった言語学にさらに科学性を持たせるべく、それまでの内観心理学との紐帯を絶ち、言語を外から

観察する方法論を確立する根拠を行動主義心理学に見出したテキストである。ここでは、John B. Watsonらの行動主義心理学の原理である「刺激（S）→反応（R）」の図式で言語現象（観察可能な表層面）を説明しようとするBloomfieldの態度が見て取れる。

「刺激→反応」の形式で表される行動主義心理学の原理の根底には、「アミーバから人間までのすべての生物に適用できる連続性」があり、これはダーウィンの発想に他ならない。そしてこの視点が、物理学や化学といった自然科学における「原因→結果」の因果律にも関連するものとすれば、この図式を応用した言語学は自然科学の一般性を持つものとなる。その意味で、Bloomfieldが目指したものは、Saussureと同じく言語学の隣接諸科学からの方法論的独立であり、また言語学の科学的厳密性の追及であった。そのため、言語の持つ「人間（精神的側面）、特に「意味」の研究は言語学から排除された。Max MüllerやHumboldt, Sapir, Whorf的言語観ではなくDarwin的言語観を徹底的に推し進めていくと、このBloomfield型の極端な言語理論となる。

4. 到達すべきIdeas

上に述べた、各セッションの内容説明から、それぞれのセッションを貫く大きなテーマがあることが見て取れる。それが、Great Books Seminarの最終的な目標である、主題（トピック）を統合するSyntopical Readingへとつながる。

各セッションを貫く最も重要なテーマは「言語の本質の解釈における二元性」である。プラトンとアリストテレスの項でまず問題になったように、言語起源に関する「自然vs人為」の対立である。この二分法的対立は、ギリシア・ローマ古典時代では「整合説（analogia）vs 不規則説（anomalia）」として、さらに古典時代以降でも「形態主義 vs 機能主義」「唯名論 vs 実在論」「合理主義 vs 経験主義」などとさまざま形をとりつつ言語を考察する上での原理的な方法論的対立として繰り返されてきた。

セッション2においても、言語起源に関する聖書の人為説的な解釈と、言語を人間の内部からの必然的な表出であるとするHerderの自然説的解釈が見て取れ

る。そして、この「自然vs人為」は、言語学の方法論的対立として、「言語は人間と必然（自然）的關係があるので、言語を人間の精神と関連させて考察する」立場と「言語は慣習的なシステムに過ぎないから言語そのみを独立させて（それ以外の要素を排除して）考察する」という立場に原理的に分かれていく。

今回のテキストの中では、前者にはHerder, Max Müller, Humboldt, Sapir, Whorfらが入り、後者にはDarwin, Saussure, Bloomfieldが含まれる。これは別の見方をすれば、人間の言語になんら神秘的な意味合いを見出していないのがDarwin, Saussure, Bloomfieldらであり、それゆえ人間の言語の考察から人間に関するさまざまな学問（特に、目には見えない人間の精神面に関する考察）を排除し、言語のみを対象とする真性言語学を打ち立ててきた。その背後には、「人間とその他の動物の間には生物学的にも知的な点においても質の差はなく、程度の差のみ存在する」というDarwinの思想が見て取れよう。

言語学の方法論における原理的対立である「自然 vs 人為」は究極のところ、一般学問論における「nature vs art」（「science vs technology」と読み替えもよい）の対立に連なる。物理学や数学のような純粋厳密（自然）科学ではなく、何らかの形で人間（特に内面的精神的領域）を取り扱うすべての学問において、この対立は宿命的な二元論的対立（例えば法学における「自然法vs実定法」の対立）となっている。

結 び

ここで示した「言語・思考・人間」というモデルセミナーでは、さまざまな言語学関連のGreat Booksを読み議論する過程で、最終的に「nature vs art」という言語学のみならず、「人間」の内面に何らかの形で関連する諸学問に共通した二元論的対立という点まで到達することが目的であった。言語学のテキストという極めて限られた分野から、普遍的な問題へと進み、そこから類推作用により各自が個別に関心を持つ領域に当てはめることで、自らの問題解決と、さらには深い「ものの本質」への洞察を深めることができよう。

一見関係ないと思われる領域の問題でも、本質の段

階にまで絞り込んで議論すれば、そこから普遍的な問題へと広がりを見せる。今回のモデルセミナーで言えば、「学問」、究極的には「人間」という存在が宿命的に持っている二元性（Descartesの言う、人間のbodyに関する物理と人間のmind/spiritに関する心理・哲学）に関連づけることができる。そういった本質的・普遍的関連の知的好奇心に動機づけられ、より幅広い読書と議論を通じて人類に普遍かつ不変の問題を考察することが一般教養、生涯教育の目的であり、大学、あるいは読書会の場で十分実践可能なものであることが理解されたであろう。

文 献

- Adler MJ (1978): *Aristotle for Everybody*. Touchstone, New York.
- Adler MJ (1984): *The Paideia Program. An Educational Syllabus*. Macmillan, New York.
- Adler MJ (1988): *Reforming Education: The Opening of the American Mind*. Ed. Geraldine Van Doren. Macmillan, New York.
- Adler MJ, Doren CV (1972): *How to Read a Book*. MJF, New York.
- Humboldt Wvon (1836)/ 亀山健吉 (1980): *言語と精神*. 法政大学出版社, 東京.
- Hutchins RM, Adler MJ (Ed.) (1952): *Great Books of the Western World*. Encyclopedia Britannica, Chicago.
- 松田義幸, 須賀由紀子, 江藤裕之 (1999): *グレート・ブックスとの対話－「学習社会」の理想に向けて*. かながわ学術研究交流財団, 神奈川.
- Max Müller F (1888): *Three Introductory Lectures on the Science of Thought, Delivered at the Royal Institution, London, during the Month of March, 1887*. The Open Court, Chicago.
- Pieper J (1952)/ 稲垣良典 (1988): *余暇と祝祭*. 講談社, 東京.
- Saussure F (1916)/ 小林英夫 (1940): *一般言語学講義*. 岩波書店, 東京.

【Summary】

Introduction of the Great Books Seminar into the College Liberal Arts Curricula

Hiroyuki ETO

Nagano College of Nursing

The present paper tries to consider theory and practice of the liberal arts curricula in Japanese colleges with a view to re-evaluating college education as a place of “Bildung”.

After an overview of history and meaning of liberal arts education of the Western world, we make a brief examination of the “Great Books Seminar” established and fostered by Mortimer J. Adler, which embodies the spirits of the traditional liberal arts education in the modern society.

From the perspective of Adler’s “Great Books Seminar”, we try to construct a model-program of a dialogue-style seminar in order to apply the liberal arts methods into the college curricula in Japan. We present 1) the general theme: “language, thought, humanity”, 2) the program and texts, 3) themes of each session, and 4) goal ideas.

As a result, we are supposed to come to the following conclusion: Through a discussion of texts on a very limited theme, we are able to aim at a more universal and general problem to be solved, recognize the value of what cannot be seen, and, consequently, seek for effective motivation and learning-to-learn methodology for continuing education in order to build a “learning society”.

Keywords: Bildung (culture), General Education, Liberal Arts, Great Books Seminar, Dialogue

江藤裕之（えとう ひろゆき）
〒399-4117 駒ヶ根市赤穂1694 長野県看護大学
0265-81-5138 (Fax 兼)
Hiroyuki ETO
Nagano College of Nursing
1694 Akaho, Komagane, 399-4117 Japan
e-mail: heto@nagano-nurs.ac.jp